

■2018 D1 GRAND PRIX SERIES Rd. 3 AUTOPOLIS DRIFT

コースコンディション：予選ウエット、決勝ウエット→ドライ

PACIFIC RACING TEAM DUNLOP 野村 謙選手（車両：NAC R34 DUNLOP BRIDE）

最終成績：予選不通過

■レポート

2018年D1GPシリーズ第3戦の舞台は、大分県のオートポリス。4年ぶりの開催となるこのコースは野村選手の地元・九州でもあり、野村選手の応援がもっとも多いサーキットだ。また野村選手自身3回の決勝進出経験があり、相性のいいサーキットでもある。

スーパーGTなどのレースも行われる本格的なレーシングコースだが、D1GPではストレートからファイナルコーナーを逆走で使用する。ストレートを加速してファイナルコーナーに飛び込み、いちど振り返して、客席の前を駆け抜けていくレイアウトだ。ただし、スタート位置は以前よりも前になり、進入速度は低くなった。また、審査に関しては、進入速度は特別重要ではなく、平均車速とドリフト区間の角度の大きさと姿勢の安定性、そして振り出しと振り返りのクイックさがバランスよく求められる。

野村選手は、このラウンドの前にテスト走行に行こうとしたが、そこでエンジンプロー。突貫工事で修理して、なんとか間に合わせてきた。オートポリス入りしてから金曜日の練習走行ではタービンに不調をきたし、土曜日にはタービンを交換して臨んだ。

しかしトラブルは続いた。土曜日の練習走行1本目ではサイドブレーキが利かなくなる症状が発生。これはハブのガタだったようで、対処することができた。またタービンまわりのウォーターラインから水漏れが発生し、これも交換となった。練習走行2本目は大きなトラブルなく走ることができたが、いまひとつDOSSの点が伸びない。「カッコいいといわれた走りのほうが点は低かった」と悩みぎみの状態で予選本番を迎えた。

そして雨の中で行われた予選1本目、野村選手は130.6km/hというまずまずの進入速度からするどい振り出しを見せ、大きめの角度をつけて最初のコーナーを抜ける。ここまでは高得点が期待できる走りだった。しかし、振り返りのあとハーフスピン。これがひびいて94.17点となってしまった。2本目は全体的に車速も低く、角度も小さくなってしまい、ハーフスピンのような大きなミスはなかったものの、93.08点という得点。残念ながらグループのなかで上位4人に入ることはできず、予選敗退となってしまった。これでシリーズランキングは18位となった。

■野村謙選手コメント

ラックが壊れていて、ほんのちょっとなんやけれど、5ミリくらいガタがあると、タイヤのほうではもっと動くみたいで、直線からもうバタバタいってて。練習のときから、ちょっと症状は出たの、ずっと。でも替える時間とか予備がなくて。あと直す優先順位もあるでしょ。サイドブレーキがまったく効かなくなって、まずこっちを直そう。こんどは水が出て、こっちを直そう。最後にステアリングラックだけ残って。でももう走る直前で時間がなくて。これはもう「このままいくばい！ラックのことは忘れよう！」と。でもそう思ってもわかるから……振り返りがすごくむずかしかった。あれ、あのまままわっていければ上位で行けたんじゃないかと思うんやけどな。スピンして94点やったら……。惜しいことをしたばい。

やっぱりクルマがね、いろんなところにガタがきだした。まあでも楽しかったかな、悔しいけど。2日徹夜。つぎは完璧にしたいなあ。でも恵まれてるよ。みんなこうやって手伝ってくれて。